

氏 名	松田 祥平
学 位 の 種 類	博士 (文学)
報 告 番 号	甲第 553 号
学位授与年月日	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 2 8 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	一九二〇～三〇年代における探偵小説概念に関する研究
審 査 委 員	(主査) 金子 明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 川崎 賢子 (立教大学大学院文学研究科特任教授) 浜田 雄介 (成蹊大学文学部教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

はじめに

凡例

#### 第Ⅰ部 〈探偵小説〉の成立と変容

##### 第一章 再編成される〈探偵小説〉

——九二三年以前の『新青年』における「高級探偵小説」イメージ

##### 第二章 通俗小説が架橋する探偵小説と〈文学〉

——探偵小説文壇における芸術規範の最盛期

##### 第三章「大衆」に読まれるために

——九二六年周辺における大衆文学言説の形成と探偵小説ジャンル

#### 第Ⅱ部 〈探偵小説〉の展開

##### 第四章 探偵小説をめぐる相克の中での夢野久作

——本格／変格論争を軸として

##### 第五章 撞着する思想と形式

——夢野久作作品における本格探偵小説形式と決定不可能性

##### 第六章 〈名探偵〉からの逸脱

——小栗虫太郎「聖アレキセイ寺院の惨劇」論

##### 第七章 諧謔と風刺の館

——小栗虫太郎『黒死館殺人事件』論

おわりに

初出一覧

参考文献リスト

### (2) 論文の内容要旨

本論文は日本における探偵小説ジャンルの草創・確立期である 1920～30 年代に焦点を定め、同時代の文学諸ジャンルとの相互関係やメディア動向との相関において探偵小説概念がどのように編成され、作品創作とどのように関わったかを検討するものである。

第Ⅰ部では、主に 1920 年代のメディア動向を分析し、探偵小説に付与される独自の価値のあり方が、出版界全体の動向を下部構造として、既存の芸術的な文学や新興の大衆文学などとの相互的な関係性の影響を受けながら定まっていく動的な過程が記述される。

第一章では、江戸川乱歩登場以前に探偵小説ジャンルの形成を牽引した雑誌『新青年』（博文館）を詳細に分析し、当初、後の本格探偵小説の系譜に連なる謎解き中心の作品群を「高級探偵小説」と卓越化することによって文化的イメージを保っていた『新青年』が、後の変格探偵小説の系譜に連なる、「高級」規範から逸脱した作品群に対して芸術性という新たな

準拠枠によって価値付与することで誌面に取り込み、探偵小説作品の流通を質的に拡大させていったプロセスが記述される。第二章では、第一章の延長線上に、乱歩の登場と並行して、探偵小説の芸術的側面を重視する傾向が拡大し、規範的な役割を果たす状況が分析されると同時に、芸術的な文学（主流文学）の領域での通俗小説の地位の向上によって、結果的に探偵小説と主流文学が接近する様相が分析される。その一方で、第三章では、新講談にルーツを持つ大衆文学がジャンルとしての独自性を獲得する時期に、既存の通俗小説との差異化によって独自性を確保しようとした大衆文学が出版界の力学によって探偵小説と接合されたことによって、探偵小説側に主流文学との異質性を前景化する動向が生じ、ユーモア探偵小説の伸張などの探偵小説の多様化の進展や、論理性を探偵小説独自の本質とする認識の条件になったことを指摘する。

第Ⅱ部では、主に 1930 年代を舞台として、第Ⅰ部で記述された探偵小説概念・規範における本格（論理性）／変格（芸術性）という二項の微妙な関係性が、どのように創作に作用しているか、夢野久作、小栗虫太郎という個性的な二人の作家に即して分析する。

第四章・第五章は、夢野久作を論じて、本格探偵小説の論理性・科学性を規範として内面化しながらも、本格探偵小説の形式性・ゲーム性をアイロニカルに利用してみせることによって、本格／変格の二分法を乗り越え、探偵小説の限界を突破しようとする志向を見出し、代表作「ドグラ・マグラ」から、単に反科学的な精神主義ではなく、独自の論理的な枠組に準拠した謎の解明を行いつつ、認識枠組と真相を同時に決定不可能な場所に置く、本格の枠組を使って本格的推理を宙吊りにするパロディ性を抽出する。

第六章・第七章は、小栗虫太郎を論じて、本格探偵小説で活躍する探偵の論理性それ自体を相対化する作品系列として「聖アレキセイ寺院の惨劇」から代表作「黒死館殺人事件」に至る法水麟太郎シリーズを再定義し、同時代に本格探偵小説の象徴であったヴァン・ダイン作品の探偵ファイロ・ヴァンスに対する戯画・パロディを提示する批評的距離を指摘する。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### （１）論文の特徴

本論文の特徴としては、まず、主要な探偵小説メディアである『新青年』を調査対象の主軸としつつも、掲載された記事や作品の意味を、芸術的な文学ジャンルや通俗小説ジャンル、大衆文学ジャンルなど、探偵小説を取りまく諸ジャンルとの相互的な関係性の文脈において読み解く方法が指摘できる。それによって、ジャンル領域内での探偵小説概念・規範をめぐる言説を、閉じた空間での議論としてではなく、出版界の動向を下部構造とした諸ジャンルの相互関係の中で再解釈することを可能にしている。次に、具体的な作家の創作活動を、作家が内面化した探偵小説概念・規範との関係性において理解する姿勢が指摘できる。それによって、従来の作品論の枠を超え、探偵小説というジャンルのあり方と作品との相互的な形成過程が、個別的な作品読解の視界に導入されることになる。

### （２）論文の評価

第一に、本論文の論述のベースとなっている雑誌『新青年』を初めとする同時代的な探偵小説ジャーナリズムの言説について、先入観のない視点から、改めて幅広くかつ詳細に読解しようとする姿勢は、基本的な研究姿勢として高く評価できる。

第二に、本論の主要な目論見である、芸術的な文学ジャンル、通俗小説ジャンル、大衆文学ジャンルなど、諸文学ジャンルの相互関係の中で探偵小説ジャンルの形成過程を記述しようとする試みは、その形成期における新たな探偵小説ジャンル像の説得的な提示に成功しており、文学史記述の新たな方向性を指し示す研究として一定の評価ができる。そのような文学史への新しい視角の広がり、文学ジャンル全般の歴史認識においても大きな影響力を持つ可能性があるものと認めることができる。

第三に、個別作家の作品を扱う局面においても、ジャンルの歴史、作家が内面化する探偵小説概念・規範との関連性を前景化して読み解く手法は、例えば小栗虫太郎のユーモア探偵小説性、パロディ性、滑稽性を浮上させるなど、新たな作品理解の可能性と結びついており、夢野久作、小栗虫太郎についての論考としての物足りなさはあるものの、今後の研究展開の可能性を示すものと期待することができる。

研究上の手続き、記述の論理性、論文作成の作法も必要なレベルを充たしており、学位に相当する優れた研究成果と認めるものである。